



株式会社 **アルプス出版**

〒461-0004 名古屋市東区葵一丁目15番18号
オフィスサンナゴヤ 6F

TEL 052-931-1009 FAX 052-932-1312

<http://www.alpspublishing.co.jp/>

企画・制作：株式会社 新聞ビル

あかしん

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

Nobuo Murakami



元氣のでてくる“ことばたち”

234

村上信夫

全集を置いて行った。若村さんは、帰りの車中で、全集に読み耽り、持ち前のチャレンジャー精神が湧きあがってきた。

た詩に、必要以上の感情はいらない。若村さん自身も「みずゞの詩を読むより、みずゞの役を演じるほうがずっと楽です。詩だけの世界観を提示するのはとても難しいです」と言っている。だが、512の朗読は、聴き手

■村上信夫プロフィール

2001年から11年に渡り、『ラジオビタミン』や『鎌田實いのちの対話』など、NHKラジオの「声」として活躍。現在は、全国を回り「嬉しい言葉の種まき」をしながら、文化放送『日曜はがんばらない』（毎週日曜10:00～）、月刊『清流』連載対談～ときめきトークなどで、新たな境地を開いている。各地で『ことば磨き塾』主宰。1953年、京都生まれ。元NHKエグゼクティブアナウンサー。これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。著書に『嬉しいことばの種まき』『ことばのビタミン』（近代文藝社）『ラジオが好き!』（海竜社）など。趣味、将棋（二段）。<http://murakaminobuo.com>

頼もしい。

「元々冒険家の気質があるんですよ（笑）。苦手を作りたくないし、安住したくないんです」。

無名塾に入った時に、仲代達矢さんと宮崎恭子さんに言われた。「私たちは受け身の仕事だから、自分から発信できるようにならなきゃいけない」と。

当時は、その意味がわからなかったが、人生の折り返し地点を過ぎて、未踏のものにトライして、ちゃんと役者をやるんだと『自分への役者宣言』をした。

の想像の余地を残した素晴らしいものに仕上がった。

苦手を作りたくない

女優 若村麻由美さん

冒険家の気質

まるで若村さんの追っかけのよう芝居を観ている。観る度に違う若村さんに会えるので楽しい。毎回未知への挑戦をしている姿も



俳画／イネ・セイミ

生きる覚悟の死に支度

常に「断捨離」をしている。五十代に入ったばかりだが、ご本人曰く、「もう死に支度をしてい

る」。

「死に支度イコール死ぬまでどう生きるかですよ。自分への役者宣言もその1つです」。

そう思うようになったきっかけは、31歳でヒマラヤのカラパタールに登頂して、5545mの地点に立った時、シンプルに生きたいと思ったからだ。本当に必要な物だけで暮らして行きたいと思った。仕事に支配されていた自分を直そうと思った。

「置いておきたい物だけに囲まれて死ぬのが理想ですね。愛着のあった物は行く先を全部決めて、自分が消える時は、自分が関わった物すべても消えるといいなと思っています」。

好評発売中

人は、ことばで磨かれる

村上信夫 対談!



■イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の（故）川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元（故）村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

俳画教室開講中

ところ 常滑市
とき 俳画教室 月一回 午後一時三十分～三時三十分
会費 一回 一、二五〇円（三ヶ月分前納制）
問合せ ☎〇五六九三三〇四七〇

インディアンフルート教室開講しています。

誰でも簡単に音が出せる楽器です。あなたも今日からインディアン。

受講生募集!!

会場 マツイン楽器店
ミュージックガーデン武豊
時間 隔週水曜日（月2回）
10:00～11:00
形態 グループ
会費 1ヶ月8,802円（入会金5,400円）
詳しくはマツイン楽器店本社 教室係まで
フリーダイヤル:0120-37-5576

講師 イネ・セイミ
（日本インディアンフルートサークル協会デレクター）
ネイティブアメリカンのフルートが感じられる
インディアフルート。その音色はやさしく心に響きます。
レッスン・30分4,000円 会場・半田市柳ヶ丘

申込み 0569-89-7127
お問合せ ine.seimi.jp@gmail.com

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

— 自分ドラマつくろう — (84) 岡田 清治

姪の就職 2

真三は女将からついでもらった冷酒の猪口を右手でかかげながら「カンパイ」と、二人のグラスと軽く合わせながら音頭をとった。三人はその合図でそれぞれのグラスや猪口の酒を一気に飲んだ。

一息ついたところで前島が真三にたずねた。

「そうですか。空港からですか。どちらかへいつておられたのですか」

事情を知らない前島は真三の答えに耳を傾けた。

「以前にもお話したと思いますが、姪がインドに立ちますので姪の母親と見送りに行ってきました」

「インドはこれから発展する国で興味深いですね。とくにIT関係者にとっては目を離せないです。アメリカのシリコンバレーと同じくらい重要なところですよ」

「姪はIT技術者ではなく、就職試験に落ちて、現地にいる友人に会いに行く、いわば何かを求める旅のようです」

「いまは就職率も高く、あまり会社を選ばなかったら就職できるようですが…」

「真三さんの姪御さんは、しっかりした目的があるのでしょうか」

女将が二人の会話に割り込んできた。

「それほど明確な目標があるとも思えませんが…」

「インドから帰ってこられたら、次のステップに歩まれますよ。子は親が思うほど頼りなくないですよ。静かに見守ってあげることだと思いますよ」

女将は真三を諭すような言い方をした。

「そうですよ。真三さん。それにしてもIT技術は日進月歩で発展していますね」

「私もITについては素人ですが、社会人になってからこのかた、ずっと興味をもっていました」

真三は三、四十年前、自分がこの分野に個人的にどう入ったかを思い出しながら二人に話し始めた。

「私が実際に活用する十年ほど前から『マイコン』という言葉がマスコミに登場していましたが、いよいよいまの人工知能（AI）のように、お目にかからない日がないくらいでした。そうなってくると気になるのです。すでに周りには個人的に取り組んでいる人もおりました」

私は言葉の意味について考える癖がありまして、マイコンというのは「私のコンピュータ」だろうと解釈していました。その意味も含まれていたようですが、海外では全く通じないと言われました。マイコンとは、マイクロ・コンピュータ、つまり超小型のコンピュータだということだったのは、それからずいぶん後だと思っています。

「そうでした。私がこの世界に興味を覚えたのは学生の頃ですが、それでも真三さんのずっと後の時代です」

前島は真三の話に興味を持ち始めた。

「マイコンとはどういうものだと問われても明確に答えられる人は少なかった。まして持っている人と

なるとなおさら少ない。持っている人は圧倒的に若い人で中高年齢者は避けていた。でも関心がないのではなく、操作が難しいからだと思っていた。

そうした状況下で真三は四十歳の時に衝動的に買った。マイコンは本当にすばらしく役立つと思う反面、素人には難しくメーカー、販売店もサポートが不備で、この時点では企業レベルでの普及段階で個

人が持つには高すぎるというのが実感だった。

「なんでも初期に導入するにはリスクもあります。技術は日進月歩ですので、取り残される心配もあります」

前島は真三には進取の気性があると感心した。

「その通りですね。スマフォがそうです。電話機能だけで十分だとガラ系の携帯を続けていたら、もうスマフォには乗り移れないです。アイパッド（iPad）を発売早々に購入していましたから、これで十分と考えたこともスマフォに乗り移らなかった理由です。しかも通信費が割高ということもありましたが…」

「加齢とともに新しい機器や操作は面倒なものです。また機能が過剰で使いこなせないのも事実です」

「私が買ったマイコンはNECのPC-8801という機種である。要はいまのPCと同じでキーボードを備えたタイプライターのようなものだ。マイコン用の言語（BASICレベシック）といった初心者向け汎用記号命令体系の英文の略語。

「ビィービィービィー」机の上のカセット・テープ・レコーダが耳をつんざくような不快音を突然、発する。頭が痛くなってくる。胸が苦しく吐き気をもちます。

「なんですよ」と、るり子が夕食の後片付けの手を止め、台所から険悪な顔をのぞかせる。

「よく、わからないんだ」

「夜の十時だというのになにをやっているんですか。隣近所に迷惑がかかるでしょう。それでなくても、ちよつとした物音で文句が出るのに…」

るり子は階下の住人にはビリビリしていた。公団に住んでいたころのこと、なにしているんじゃ！水が漏れているんじやないか？ええ奥さん！とランニングシャツにステコ姿のおつさんが怒鳴り込んできた。原因は階上の家の洗濯機のホースがはずれていることだったが、菓子折り持参して謝罪して以来、階下の住人には神経を使っていた。

「外国人は日本の住宅はウサギ小屋のようだとその狭さを皮肉りますが、それ以上に防音、防水の欠陥を痛感しますね」

前島も集合住宅に住んでいた経験から真三の話に同情した。

「それもそうですが、戸建て住宅も経年劣化で壁や屋根瓦がいたんで、周囲の家にご迷惑がかかるのではないかと心配が消えませんか」

ママも日本の住宅の難しさを感じていたので、二人の話に割り込んできた。

「そうだな。高層マンションも建物の劣化が起こった時に協同組合や自治会では議論が白熱するのです。私の住んでいるマンションで玄関横のタイルがはがれ、修繕するかどうかで議論しました。なかなか意見がまとまらなかったのですが、誰かがそこにテープをはっておいたら、議論はそのうち

に立ち消えになりました」

「マンションや団地も建て替えになると、困難を極めます」

「そうですね。それぞれの家族や人生設計が異なりますから、まとまらないのが当然だと思います」

「被災地の方々が次のをどうするかというと、まとまって集合住宅へ移る人、故郷を離れる人、あるいは元の場所です再建する人に分かれますので、行政も大変だと聞きますね」

「だいたい住宅は賃貸がいいのか、分譲がいいのかという議論が繰り返されています」と、真三は問題提起した。

「それは日本人は所有欲が強いのとちがいますか。せめて家ぐらい自前のモノを持ちたいという願望が根強いように思いますね」

前島が日ごろ思っていることを述べた。

「日本ほど新築の住宅を販売している国は少ないようです」

「だいたいアメリカ人のライフスタイルをみてみると、住宅のみならず、家具や調度品までレンタルしているようです」

「阪神淡路大震災の折に、マンションをローンで払っていた人は、二重の苦しみを味わったといえます」

「そうです。だから賃貸の人は助かったというわけですよ」

三人は日本の住宅についてお互い思っていることを述べ合った。

前島は「企業だつて最近では本社ビルを賃貸しているところも増えているような気がします。事業を拡大したり縮小したりする時代ですから自社ビルを所有する時代は遅れているという人もいます。昔は信用力のシンボルのようなところもありましたが…」

「いまの若い人は家を含めてモノを持たない傾向にあるように、息子なんかをみていますと思いませんか」

真三はつくづくそう思うのだった。

「だけどこれは自然災害が多い国では建設会社は有望株なんですよ」

ママが証券投資先として感想をもらした。

「確かにそういうことで全国いたるところに建設会社があつて、政権の集票マシンといわれるように公共事業の獲得にしのぎを削っています。時には談合を繰り返して利益確保に熱心です」

真三が解説しながら「需要という面を考えますと、葬儀屋が儲かると思っていました、どうもそうではないようです」

「人は必ず死にますので需要はあるように思えます」

「ところが、人口減と大都市への人口集中、さらに送葬の儀の簡素化などにより、この業界も様変わりしているようです」

「そういえば、以前のように葬儀をする家も減っているようです」



■プロフィール

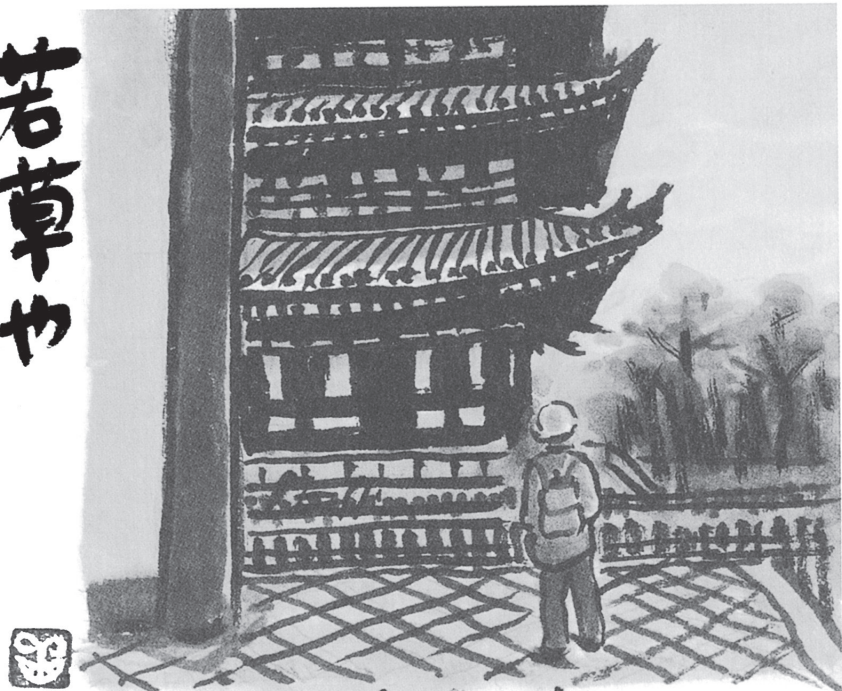
著者：岡田清治 おかだ・せいじ

一九四二年生まれ ジャーナリスト（編集プロダクションNEXT108代表）著書に『高野山開創二百年 いっぱいさん行状記』『心の遺言』あなたは社員の全能を引き出せますか！『リヨンで見た虹』など多数



【写真】山の木々は自然の中でうまく共生している（著者撮影）

若草や
いにしえ思ひ
斑鳩へ



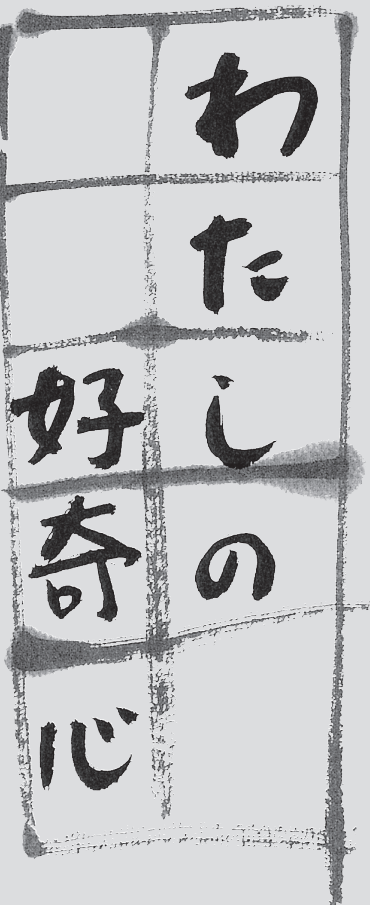
法隆寺の五重塔に妻見とれ

本年、造形大の卒業制作に取組む
テーマを「瓦屋根」とし、モチーフを
求めて、先月、奈良大和路と散策。
今回、法隆寺五重塔を描きました。
飛鳥時代のこの塔は釈尊の遺骨
が奉安され、寺院では最も重要な
建物であり、高さは約三三・五m、わが
国最古の五重塔です。法隆寺には、
七つのミステリーがあるといわれ
その一つに五重塔最上層の相輪
には、聖徳太子の雷よけの鎌だ
といわれる四本の鎌が刺さって
いるとの事ですが真相は謎です。
妻は、塔の相輪を見上げています。

若い頃、お給料を頂くと、ひとりよく奈良へ行きました。
京都も好きでしたが、我が青春は奈良とともにありました。
斑鳩、飛鳥、西の京……これらの記憶は未だに
胸がキュンとします。
あの頃は健脚で、トコトコよく歩きました。
四月生れの娘の名も、佐保姫から頂きました。佐保路 佐
紀路も懐かしいです。
奈良は自分の思いというより、和辻哲郎や亀井勝一郎の
眼を通して見たり感じたりしていて、仏像は悉く。
塔は住みたい場所でありました。
お釈迦様の墓ですのね。
結婚して人生の墓場に入ったと申しては、
罰当りでしょうか

かしこ

絵手紙 第二集



絵文 縦山 善久

返文 小林 玲子

縦山 善久

昭和十一年碧南市で生まれる。
丸栄陶業株式会社代表取締役。
碧南商工会議所会頭。
愛知県陶器瓦工業組合理事長。
全国陶器瓦工業組合連合会理事長などを歴任。
平成十三年藍綬褒章受賞。
平成二十二年旭日小授章受賞。
丸栄陶業株式会社取締役会長を経て相談役に。
京都造形芸術大学・通信教育部芸術学部美術科・
洋画コース大学院修士課程修了。
平成二十九年六月碧南市藤井達吉現代美術館にて
初の作品展開催。社名を栄四郎瓦株式会社に変更。
独立美術展 入選。

小林 玲子

碧南市に育つ。
西尾市在住
共著「西尾の民話」
童話「サケの子ピッチ」
随筆「海辺のそよ風」
(中経コラム「閑人帳」より)
ミュージカル脚本
「みぐりちゃんのおうち」
童話集
「タアタとバアバのたんけんたい」

わが家のニューフェイス



石垣^{はるひ}春陽(11ヶ月) 刈谷市半城土



愛と *My Family*



河合陽太(5才) 夏歩(3才) 晴季(7才) 紗代(1才) 常滑市井戸田町





中根由美子 作品展
中根 啓

アーティストの服 ■ Kei のシャツ

2018・4・4(水)～4・13(金)
10:00～17:00
最終日15:00まで
休日 8(日) 9(月)

春夏のワンピース、オーバーオール、Tシャツなど。
久しぶりに手がき染めもしました。

ギャラリー喫茶 イブ

愛知県岡崎市稲熊町8丁目169-6
☎(0564)26-2113



デュプロ販売株式会社 (名古屋)

東海・北陸地区発売元

デュプロは
コンピュータネットワークを活用した、
お客様の新しいビジネススタイル
“e-BUSINESS”を提案していきます。

情報を美しく。デュプロ

Duplo®

from print to documents

デュプロ販売株式会社

〒460-0015 名古屋市中区大井町4番19号 TEL (052)321-2020

知多の新鮮たまご 発酵ケイフン

(有) 知多エッグ

知多郡武豊町二ツ峯380

TEL (0569)73-6341

FAX (0569)72-6741